

子どもに向ける大人の愛情 —「アガペーの愛」からその本質を探る

The essence of adult Agape's Love for children

金 允貞
KIM YunJoung

要 旨

本研究は、2018年保育所保育指針において「乳児」「1歳以上3歳未満児」の保育の内容にのみ「愛情豊かに」という文言を提示したことに対し、その本意を理解する手がかりがなく大人の愛情が手段化されることへの危惧から、子どもに向ける大人の「愛情」の本質を明らかにすることを目的とした。そのため、田中智志（2017）が教育の基礎として提示した「アガペーの愛」の概念や特性を分析し考察を行った。

神の人への愛を前提とするキリスト教的なアガペーの愛は、意味や価値等の有用性とは無関係な、人の存在そのものに無条件に応答する営みである。子どもに向ける大人のアガペーの愛は交換のように子どもに愛を与え成長可能性を回収する営みではなく、子どもの存在を絶対的かつ無条件に愛し続ける。また、このようなアガペーの愛は、与えることによって何かを獲得する交換ではなく贈与するものである。さらに、それは光として子どもを照らし、そうすること自体を喜ぶ「自己贈与」である。また、アガペーの愛は大人に無条件の愛を呼びかける子どもと、そのような子どもの存在自体を喜び、無条件に子どもを「存在肯定」する大人との間で生じる相互的な営みである。大人の愛が子どもの成長可能性を見つけ伸ばす目的のためのものとなると、その愛は子どもを操作し計画的に育て上げるための手段となりかねないが、大人に対してその愛を呼びかける子どもの存在と、子どもの存在自体を無条件に喜ぶ大人がいる限りそこで営まれる愛は手段として利用されるものにはならない。大人がアガペーの愛に向かう「弱さの力」を通して子どもと共に生きるとき、子どもの存在を絶対的かつ無条件に受け入れ呼応するアガペーの愛を実現することとなる。

1. はじめに

2018年改定の保育所保育指針では3歳未満児の保育に関する記載の充実が図られた。乳児から2歳児までは、心身の発達の基盤が形成されるうえできわめて重要な時期であり、この時期の子どもが、生活や遊びの様々な場面で主体的に周囲の人や物に興味を持ち、直接関わっていく姿は「学びの芽生え」といえるものであり、生涯の学びの出発点であるという認識のもと、3歳未満児の保育の意義をより明確化し、その内容について一層の充実を図ることとなったのである（汐見 2018：45）。

ところが、汐見（2018）によると、3歳未満児保育に関する記載の充実には、以上のような一般的な意義だけではなく、3つの現実的な背景がある。一つ目は保育の改善と質の向上を図ることが課題になったことである。3歳未満児に集中していた待機児童問題の解決策の結果、保育所の増設及び既存の保育所における0、1、2歳児の保育の定員が増加し、3歳未満児保育の定員が大きく増えた反面、大人数では細やかなケアが難しくなった。定員数の増加による課題であれば保育の環境や条件の改善が優先されると思われるが、「一挙に改善することは容易では」ないため、「この時期の保育をより細やかに丁寧に行うことで、保育の改善と質の向上を図る」とのことである。二つ目の背景は、0、1、2歳児の保育のねらい及び内容を3、4、5歳のそれと区別して丁寧に記述することが求められたことである。2008年の保育所保育指針には、年齢の区分なく保育のねらい及び内容が示されたため、今回の保育所保育指針改定では3、4、5歳児とは発達上の違いや課題が異なる0、1、2歳児の保育のねらい及び内容を丁寧に記述することが課題となった。三つ目の背景は、乳幼児期の保育・教育において、非認知能力を育てる認識の高まりである。乳幼児期に忍耐力や自己抑制、自尊心等の非認知的能力を育てることが人間の一生において大きな影響を及ぼすことが示され、その基礎となるものが乳児期からの自尊感情や基本的信頼感などに在ることも次第にわかってきたのである（汐見 2018：45-46）。

このような背景をもとに改定された現行の保育所保育指針には、子どもの年齢を「乳児」「1歳以上3歳未満児」「3歳以上児」と三つに区分して保育の「ねらい」、「内容」、「内容の取扱い」を示しているが、「各時期における発達の特徴や筋道等を示した『基本的事項』を併せて示している」（厚生労働省 2018：86）。さらに「基本的事項」の最後には発達の特徴を踏まえて保育において特に必要なことも明記している。表1に三つの年齢の基本的事項の、アのみを示す。

表1は、上記した保育所保育指針の各時期における「基本的事項」のアの抜粋であるが、下線を引いたところから「乳児」、「1歳以上3歳未満児」の保育においては「愛情豊かに」「応答的に」「温かく」といった、保育士等の情緒的な関わりを示していることに対して、「3歳以上児」の保育においては「一人一人の自我の育ちを支えながら、集団としての高まりを促す援助」（厚生労働省 2018：183）を示している^{注1）}。

「乳児」、「1歳以上3歳未満児」の保育の内容における基本的事項に「愛情豊かに」「応答的に」「温かく」など、保育士等の情緒的な関わりを示したのは「乳児から2歳児までの時期には、保護者や保育士など特定の大人との間で愛着関係が形成」されるという、この年齢の発達の特徴を踏まえたことであろう（厚生労働省 2016b：2）。保育所保育指針解説（厚生労働省 2018：89）において、特に「乳児」に関する記載に「愛情を込めて受容的に関わる大人とのやり取りを楽しむ中で、愛着関係が強まる」、「特定の大人の信頼関係を基盤に、世界を広げ言葉を獲得していく」、「保育においても愛情に満ちた応答的な関わりが大切である」という文言からもそのことが伺える。

この年齢の子どもの育ちのために、特定の大人の受容的・応答的関わりが重要であることは従来の保

表 1. 保育所保育指針（2018）第 2 章保育の内容（下線は筆者）

<p>1 乳児保育に関わるねらい及び内容</p> <p>(1) 基本的事項</p> <p>ア 乳児期の発達については、視覚、聴覚などの感覚や、座る、はう、歩くなどの運動機能が著しく発達し、特定の大人との応答的な関わりを通じて、情緒的な絆が形成されるといった特徴がある。<u>これらの発達の特徴を踏まえて、乳児保育は、愛情豊かに、応答的に行われることが特に必要である。</u></p>
<p>2 1 歳以上 3 歳未満児の保育に関わるねらい及び内容</p> <p>(1) 基本的事項</p> <p>ア この時期においては、歩き始めから、歩く、走る、跳ぶなどへと、基本的な運動機能が次第に発達し、排の自立のための身体的機能も整うようになる。つまむ、めくるなどの指先の機能も発達し、食事、衣類の着脱なども、保育士等の援助の下で自分で行うようになる。発声も明瞭になり、語彙も増加し、自分の意思や欲求を言葉で表出できるようになる。このように自分でできることが増えてくる時期であることから、<u>保育士等は、子どもの生活の安定を図りながら、自分でしようとする気持ちを尊重し、温かく見守るとともに、愛情豊かに、応答的に関わる必要がある。</u></p>
<p>3 3 歳以上児の保育に関するねらい及び内容</p> <p>(1) 基本的事項</p> <p>ア この時期においては、運動機能の発達により、基本的な動作が一通りできるようになるとともに、基本的な生活習慣もほぼ自立できるようになる。理解する語彙数が急激に増加し、知的興味や関心も高まってくる。仲間と遊び、仲間の中の一人という自覚が生じ、集団的な遊びや協同的な活動も見られるようになる。これらの発達の特徴を踏まえて、この時期の保育においては、<u>個の成長と集団としての活動の充実が図られるようにしなければならない。</u></p>

育所保育指針からも周知のことである。ところが、「愛情豊か」という文言は2008年の保育所保育指針においては、第2章子どもの発達において「愛情豊かで思慮深い大人による保護や世話などを通して」（厚生労働省 2008：32）と、保育所に通う全年齢の子どもの育ちを支える大人の関わりとして示された反面、2018年保育所保育指針には、第2章保育の内容 1「乳児保育に関わるねらい及び内容」、2「1歳以上3歳未満児の保育に関わるねらい及び内容」の（1）基本的事項に記載されている。この「愛情豊か」という文言を3歳未満児の保育の内容に記すことについて、改定に向けての議論をまとめた「保育所保育指針の改定に関する中間とりまとめ」（厚生労働省 2016a）、「保育所保育指針の改定に関する議論のとりまとめ」（2016b）にはそこに至る経緯が示されていなく、「保育所保育指針解説」にもこの文言についての説明は見当らない。

子どもの成長を願い支え助ける保育者の関わりが「愛情豊かに」「愛情を込めて」「愛情に満ちた」ものであることに疑う余地はない。ただし、3歳未満児の保育の内容にのみ「愛情」という文言を記載したことで保育者の「愛情」が乳児期の愛着関係や信頼関係を育てるための手段として、ひいては、乳児期に育った自尊感情や基本的信頼感が非認知能力の育ちの基礎であることから、「愛情」が非認知能力を育てるための手段として捉えられてしまう可能性はないだろうか。鯨岡（2015）は現代の大人の愛情の問題について「子どもに本来向けるべき無条件の愛を、自分の言うことを聞いたときにだけ与える条件付きの愛に置き換え、それによって子どもを操作するようになった」（鯨岡 2015：7）と指摘する。子どもに向けられる大人の愛情が「〇〇をしたら、愛してあげる」など、子どもを操作する手段となり、それだけではなく「愛してあげたから、〇〇ができるようになる」と子どもに必要な能力を身に

付けさせるための手段として捉えられてしまう懸念を払拭することができない。

そこで、本研究では子どもに向ける大人の「愛情」の本質を、田中智志（2017）が『共存在の教育学』で教育の基礎として提示した「アガペーの愛」に倣って明らかにする。また、田中（2017）が「アガペーの愛」を語る際に足場としたフランスの哲学者ガブリエル・マルセル（Gabriel Marcel, 1889-1973）の著書も参考にしながら考察を深める。

2. アガペーの愛の本質

2-1. アガペーの愛とはなにか

田中（2017）の著書『共存在の教育学』は「ハイデガーの存在論をキリスト教的に解釈することにより、教育の本態を語る存在論としてとらえ直すことが目指されている。」（池田 2019：167）その中で田中はキリスト教思想に与る概念であるアガペーの愛を、教育の基礎として提示する（田中 2017：421）。キリスト教思想に基づくアガペーの愛は「神がイエスを人びとに贈ったことに暗示される」ように「本来、神の営み」であり、田中は「人の営みとしてのアガペーの愛は、そのまねびである（傍点著者）」という（田中 2017：176）。人の営みとしてのアガペーの愛が神の営みとしてのアガペーの愛のまねびであるとは、神が何の代価も求めず無条件にイエスを人びとに贈ったことに倣うことを意味すると考えられる。

加えて、キリスト教思想におけるアガペーの愛は神・人のつながりを前提にした人・人のつながりで実現される「隣人への愛」である。こうした隣人への愛は「人が人に臨むときに無条件にその人の求めに応答する。」それは、「規則随順的でも、目的合理的でもない」営みであり（田中 2017：119）、「あれこれと評言したり、有用性の有無を検証したりするものではな」い。アガペーの愛としての隣人への愛は、規則、目的、合理性に従うものやその愛が有用であったかどうか評価することとは無縁である。それは「ただ遂行される（performatif）営み」であり、「真摯に実践され続ける営み（actio）」なのである（田中 2017：215）。

さらに、アガペーの愛はペスタロッチの語る「無条件の顧慮としての愛に近い。」ペスタロッチの語る愛は「神の人への愛に与る人が人に贈ろうとする愛」であり（田中 2017：243）、現実社会における有用や効用とは無縁の「意味・価値づけを超えた」ものである（田中 2017：421）。よって、神の人への愛を前提とするアガペーの愛は「人の性質・特徴を愛することではなく、人の存在そのものを愛することである。」（田中 2017：198）

なお、「キリスト教的な愛は、ギリシャ語で『アガペー』、ラテン語で『カリタス』と表現されてきた。」ところが、『カリタス』の本来の意味は『高い価値・値段』であり、市場的概念」を帯びている。また、アウグスティヌス以来、『カリタス』は『エロス』（eros）の意味、すなわち『低い立場にある者が高い立場にある者に向かう営み』という意味を伴っていった。」このようなことから田中は「カリタス」をキリスト教的な愛である「アガペー」と区別するべきであるという（田中 2017：200-201）。すなわち、神の人への愛を前提とするキリスト教的なアガペーの愛は、意味や価値等の有用性とは無関係な、人の存在そのものに無条件に応答する営みなのである。

以上、アガペーの愛とは何かを解明するため、田中（2017）の著書を参考にしながら探ってきた。続けて、子どもに向ける大人の愛の本質を明らかにする本稿の目的にさらに近づくため、キリスト教的なアガペーの愛を特徴付ける「無条件性」と「絶対性」について詳述することとする。

2-2. 「無条件的」で「絶対的」なアガペーの愛

キリスト教的なアガペーの愛は、常に条件が問われる「交換」とは異なる「無条件性」を一つの特徴としている。田中によると「所有物の交換は常に条件付き」であるが、「神から人への愛は、功績と交換によって得られるのではない。」（田中 2017：202）人が神からの愛を受けるために何らかの功績を積み、その代価として神が人に愛を与えることではないように、アガペーとしての人への愛は、条件付きの「与える-受ける」ものではないのだ。よって、神の人へのまねびである人への愛の特徴も無条件性にあると言えるだろう。そして、人がある人を無条件に愛するとは、「人を対象化したり値踏みしたりすることなく、ある人を支え助け、その人とともにいようとする事」である（田中 2017：325）。

アガペーの愛のもう一つの特徴は「絶対性」である。キリスト教的なアガペーの愛が絶対的であるとは、その愛が「本来『神』に由来し、他のなにものにも比肩できず、それを超える規範など見いだせないから」であり、「本来のアガペーの愛は、何らかの価値（真・善・美・利益・健康など）の手段になどならない」からである。すなわち、アガペーの愛は人が何ものかに価値をおき、それを獲得するための手段ではなく、「さまざまな価値の基礎」なのである（田中 2017：202）。マルセルが「愛そのものは価値ではなく、他面において、愛なしの価値というものはありもせず、またありえない」（マルセル 1967：155）と語ったように、アガペーの愛は価値を獲得する手段ではなく、価値を基礎づける絶対的なものである。

このような無条件的・絶対的なアガペーの愛は、その愛を大人-子ども関係の中で捉えた際、近代教育学が語る一特にドイツの教育学者ノール（Herman Nohl, 1879-1960）やシュプランガー（Eduard Spranger, 1882-1963）に代表される「教育愛」と相異する。「彼らのいう『教育愛』は、子どもの発達・成長の可能性に向かう」ものであり、「子どもに能力という価値が見込めるから、子どもを愛する」と考えるため、「能力と愛は因果律で結ばれている。」（田中 2017：240）。ボルノウはこのような「教育愛」を「ギリシャ的思想によって方向づけられている」「教育的エロス」と名付け、それは「選ばれた、他からぬきんでた個々の人間に向けられている愛を意味する」ため「教育者の基本態度を示すには適していない」と述べる（ボルノウ 1985：126）。こうしてみると、キリスト教的な思想に基づくアガペーの愛が子どもの存在それ自体を肯定する無条件的・絶対的なものであるのに対して、ギリシャ的思想に基づく教育的エロスは子どもの能力に価値を与え成長・発達する可能性を愛する条件的・相対的なものとして相異するところを捉えることができる。

繰り返しになるが、キリスト教思想に基づくアガペーの愛は存在それ自体を肯定する無条件的・絶対的なものである。このことは、田中がフランスの哲学者マルセルをあげながら「マルセルは…中略…愛を交換から区別し、『存在』と結びつけている」と述べたことにつながる（田中 2017：214）。さらに、マルセル（1966）は著書『人間の尊厳』において「存在の他存在に対する愛は、その支点を、何が起ころうと私はあなたを愛し続けるという、無条件的なものの上におけると考えられる」という（マルセル 1966：119）。アガペーの愛は、子どもに愛を与え成長可能性を回収する交換ではなく、子どもの存在を絶対的かつ無条件に愛し続けることである。

3. アガペーの愛の贈与

第2項で示したように絶対的かつ無条件のアガペーの愛は、与えることによって何かを獲得する交換ではなく贈与するものと言える。次は、マルセル（1977）が述べる「贈与」の意味を取り上げながら大人が子どもに向ける愛が贈与であることを述べる。

マルセルは『存在の神秘』において「贈与」は「単純な所有の移転」ではなく「いかなる意味においても、自己贈与」であると語る（マルセル 1977：336）。この自己贈与について田中は「所有物ではなく愛の心を贈ることである」と説く（田中 2017：230）。人が人へ贈る愛は、財産のように自分の所有物として愛を相手に移転させることではない、「自己贈与」なのである。また、マルセルは贈与が「一種の無制約的性格を持つことにも注意を払」う必要があると述べる。何かを与えたことで「受ける人をしばりつけるような特定の目的のもとでは、与えることにはなら」なく、「与えるとは、回収することではない」ということである（マルセル 1977：337）。愛の心を贈ることは、その愛を受ける人をしばりつけるような特定の目的のもとでは行われない。もし愛が何かを回収しようとする目的のもとで行われるなら、それは愛とは言えないだろう。子どもに愛の心を贈ることが、子どもの成長を回収しようとする目的で行われたり大人の望むように成長させようと特定の目的のもとにしばりつけたりする場合、それは愛の心の自己贈与とはいえない。

ところが、マルセルは「贈与には正確な目的が消失している」とすると「贈与の意味まで打ち消してしまうことになりはしないか」と問い、贈与は「目的性を越えたところまで高まらねばならない」と言いながら「贈与する心は宏量」と述べる。マルセルが示す宏量は、その「定義をきわめて正確に定義すれば、『それ自身が光であることを喜ぶ光』である。そして、この「光の特徴は、照らすもの、他者を照らすものということである。」（マルセル 1977：337）ここでマルセルが示す光は「神の恵み」、「神から人への『贈り物』」である。それ故、光は「いわゆる努力・獲得・成果と無縁であり、自然・所与・湧出である。」（田中 2017：230）。

本来、神の営みである「アガペーの愛」は、神の恵みである「光」とキリスト教的思想において相通じる。アガペーの愛を贈与するのは、神の恵みとしての光を他者に照らし、それ自身が他者を照らすことを喜ぶことであり、ある目的を回収することを超えて光としてただ他者を照らすことといえるだろう。さらに、大人が子どもにアガペーの愛を贈与することに考察を広げると、それは子どもから成長可能性という目的を回収することを超えて、大人が光として子どもを照らし、そうすること自体を喜ぶことと捉えられるだろう。このような、光として子どもを照らすアガペーの愛の贈与は、倉橋惣三の『育ての心』の中の「小さき太陽」を想起させる。

よろこびの人は、子どもらのための小さき太陽である。明るさを頒ち、温かみを伝え、生命を力づけ、生長を育てる。見よ、その傍らに立つ子どもらの顔の、熙々として輝き映ゆるを。なごやかなる生の幸福感を受け満ち溢れているを。（以下省略）

「小さき太陽」『育ての心』（上）（倉橋 1946=1985：25）

倉橋は子どもの傍らに在る大人（保育者）を子どものための小さき太陽と喩え、よろこびの人と名付ける。このような大人の営みは、明るさや温かみを与え成長させるという目的に回収される「交換」ではなく、光として子どもを照らしそれ自体を喜ぶアガペーの愛の贈与と言えるのではないだろうか。

4. アガペーの愛の復権

繰り返し述べてきたように、絶対的かつ無条件的なアガペーの愛はキリスト教思想に基づく神の営みを元来とする。そして、子どもの存在それ自体を肯定するアガペーの愛はそれが「本来的に、父の子への愛」を意味するため、「生活世界的」な「親の子への愛」と類似している（田中 2017：202）。従って、生活世界においてアガペーの「愛の経験は、例外的・超越的な経験ではなく」「その親が子どもにしていること」のようなものである（田中 2017：213）

しかし、今日における「親子間の愛のねじれやもつれは、よく知られている」ことであり、その愛は「絶対的でも、無条件でもない」ため、アガペーの愛と同類とは言えない。併せて、近代におけるキリスト教の衰退によって、アガペーの愛と現実の愛は重なりうる可能性を失い、ただ区別されているのみである（田中 2017：203）。鯨岡（2015）は、今日の子どもたちは「困難な家庭状況による不幸だけではなく、大人からの『愛』が満たされない」ことに苦しんでいるが、「大人は子どもに本来向けるべき無条件の愛を自分の言うことを聞いたときにだけ与える条件付きの愛に置き換え」、しかもそれを「『子どものため』」と思い込んで、「自分の願いに引き込もうとするばかり」なのだと、大人の愛情の問題を指摘する（鯨岡 2015：9）。

ところが、田中は「現代社会において『愛』がどんなに個人主体のもとで成就化され手段化され、恣意的に利用されていようとも、愛という営みが真にキリスト教的な合意を失うことはないだろう」と論じる。なぜなら、本来のアガペーの愛は「個人主体の外から到来し、個人主体の自己言及を断ち切るからである。」（田中 2017：297）アガペーの愛は、大人が一方向的に自分の内側にある愛を子どもに与え、子どもの能力等を成就・回収する営みではない。それは、大人の無条件の「愛へ呼びかけ」する子どもと「親が子の存在それ自体を喜ぶ」ように無条件に子どもを「存在肯定」する大人との間で生じる相互的な営みなのである。マルセルは「他者に対していつも開いており、他者をよろこんで受け入れ、それによって同時に自分自身にもいっそう近づきやすくなること」を「相互主観性」と名付け（マルセル 1977：232）、そのことについて田中は「結局のところ、愛そのものの別名に他ならない」と説いた（田中 2017：385）。このように、大人に対してその愛を呼びかける子どもの存在と、その存在自体を喜ぶ大人がいる限りそこで営まれる愛は手段として利用されるものにはならず、無条件で絶対的なアガペーの愛となり得るであろう。

5. アガペーの愛を実現する大人

最後に、田中が提示した「弱さの力」を取り上げ、アガペーの愛を実現する大人の在り方を考察することとする。

田中が提示する「弱さの力」は、新約聖書に残された「パウロの言葉を縮めたものである。」（田中 2017：163）田中は、「人が見返りのために努力し、事物・他者を操作し利用する『強さの力』を棚上げし」、「無条件の愛を実践すること」を「弱さの力」と言い表す。また、「弱さの力」は「他者とともに生きること、すなわちアガペーの愛に向かう力である。」（田中 2017：158）子どもの存在自体を肯定し受け止める大人のあり方は、子どもに力をつけさせる見返りのために努力し、子どもを操作し利用する「強さの力」ではなく、無条件の愛を実践しアガペーの愛に向かう「弱さの力」と言える。

和田（1982）は「人間の有限で寄るべないことを知ってなお人間を信頼し、進んで他人に奉仕するこ

とができる人間」を、子どもに対比される「大人」と述べ、「人が自分の根源的な頼りなさにも[・][・][・][・]かかわらず敢えて自分よりも更に非力で頼りない者達のために、進んで生活の負担を引き受けようとする、『無償の愛と献身』の中に」大人らしさの特徴が「最も明瞭かつ純粋な形で、統合的に実現される（傍点著者）」という（和田 1982：206）。和田がここで示す無償の愛は田中のいう無条件の愛を実践する「弱さの力」と同様に捉えてもよいのだろう。大人は子どもに対して確かな有能性を有するかもしれないが、「やがていかに努力しても自分の能力には限りがあるし、あらゆる責任を完全に果たすことが不可能であること」に気づき、「無力で頼りないのは子どもだけではなく、人間存在そのものの実相であること、それ故にこそ人間は互いに信じ合い、扶け合うことが必要」であることを知る（和田 1982：205）。子どもの傍らにいる大人が子どもと変わらない寄り添なさや頼りなさに気づくとき、そこで大人は真に子どもと共に生きることになるのではないか。そして、それによって大人は子どもの存在を絶対的かつ無条件に受け入れ呼応するアガペーの愛を実現することになるのではないか。さらに、大人がこのような愛を子どもにむけ「他者（子ども）のために生きられること、つまるところだれか（子ども）を愛することが自分（大人）の『存在』を肯定する唯一な理由（括弧は筆者による補足）」（田中 2017：218）と見出せたとき、子どもは大人を「信じ、安らぎ、真に成長していく」ことができるのではないだろうか（田中 2017：446）。

6. おわりに

本稿は、2018年保育所保育指針において「乳児」「1歳以上3歳未満児」の保育の内容にのみ「愛情豊かに」という文言を提示したことに対し、その本意を理解する手がかりがなく大人の愛情が手段化されることへの危惧から、子どもに向ける大人の「愛情」の本質を明らかにすることを目的とした。そのため、田中（2017）の著書『共存在の教育学』を参照し、田中が教育の基礎として提示した「アガペーの愛」に倣って子どもに向ける大人の「愛情」の本質を探った。

キリスト教思想をその基盤とするアガペーの愛は、意味や価値等の有用性とは無関係の、人の存在そのものに無条件に応答する営みであり、子どもに向かう大人のアガペーの愛は子どもの存在それ自体を肯定し、子どもの存在を絶対的かつ無条件に愛し続けることであった。本稿の第3項では、このような大人の絶対的かつ無条件のアガペーの愛が、子どもの成長可能性という目的を回収する交換ではなく、光として子どもを照らし、そうすること自体を喜ぶ「自己贈与」であることを示した。大人に対して愛を呼びかける子どもの存在を肯定し、その存在自体を喜ぶ大人の間で営まれる愛は、手段として利用されるものにはならないだろう。逆に、大人の愛が子どもの成長可能性を見つけ伸ばす目的のためのものとなると、その愛は子どもを操作し計画的に育て上げるための手段になりかねない。

最後に、本稿で取り上げたアガペーの愛はキリスト教思想に与る概念ではあるが、キリスト者に限られるものではないことを断っておきたい。田中は「キリスト者ではない人」も、何らかの信に支えられつつ、無条件かつ絶対的なアガペーとしての愛に向かう愛を生きている」という（田中 2017：385）。第4項で記した「子どもの無条件の求め」に対する「母親の無条件の応じ」のような「生活世界的な愛」がそれであろう（田中 2017：213）。

本稿は、子どもに向ける大人の愛の本質をキリスト教思想に与る「アガペーの愛」のみに見出したことに限界があると考え。さらに、近代教育学が語ってきた「教育愛」との関連性について言及はしたものの表面的考察に終わっている。今後、キリスト教的アガペーの愛以外の愛の概念を探りつつ、教育

愛との関連性をより深く考察することを課題とする。

注

(注) 「乳児」、「1歳以上3歳未満児」保育における「愛情豊かに」「応答的に」「温かく」という文言は「保育所保育指針」だけではなく、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」も同様である。2018年「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の改訂に当たっては、幼稚園教育要領及び保育所保育指針との整合性を確保することを基本的な考え方とした。本研究では保育所保育指針を主に取り上げるが、上記した文言は保育所における保育だけではなく認定こども園を含め3歳未満児に対する保育において取り扱うことを断っておく。

引用文献

- 池田全之 2019 田中智志著『共存在の教育学—愛を黙示するハイデッガー—』近代教育フォーラム28 教育思想史学会 167-170
- 鯨岡 峻 2015 保育の場で子どもの心をどのように育むのか—「接面」での心の動きをエピソードで綴る ミネルヴァ書房
- 倉橋惣三 1985 小さき太陽 育ての心(上) フレーベル新書12 フレーベル館
- 厚生労働省 2008 保育所保育指針解説
- 厚生労働省 2018 保育所保育指針解説
- 厚生労働省 2016a 保育所保育指針の改定に関する中間とりまとめ
https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/matome.pdf 2021.9.17閲覧
- 厚生労働省 2016b 保育所保育指針の改定に関する議論のとりまとめ
https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/1_9.pdf 2021.9.17閲覧
- 田中智志 2017 共存在の教育学—愛を黙示するハイデッガー 東京大学出版会
- 汐見稔幸 2018 「保育所保育指針」の解説と改定のポイント ミネルヴァ書房編集部編 保育所保育指針・幼稚園教育要領・幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説とポイント ミネルヴァ書房
- 和田修二 1982 子どもの人間学 第一法規
- G.マルセル／三雲夏生訳 1966 人間の尊厳 マルセル著作集8 春秋社
- G.マルセル／松浪信三郎訳 1977 存在の神秘 マルセル著作集5 春秋社
- O.F.ボルノウ森昭／岡田渥美訳 1985 教育を支えるもの 黎明書房

参考文献

- 矢野智司 1999 和田修二の教育人間学 皇紀夫・矢野智司編 日本の教育人間学 玉川大学出版部
- 矢野智司 2008 贈与と交換の教育学—漱石、賢治と純粹贈与のレッスン 東京大学出版会